

王朝和歌の世界 — 写本の魅力 —

田 中 登

ご承知のように、和本には人が手で書き写した写本と、印刷をした版本とがあります。一般に江戸時代以前にあっては、文学作品は印刷されることはなく、すべて写本という形で読まれていました。そして、この写本について注意すべきは、平安・鎌倉時代の人々は、ただ単にもとの本を正確に書き写すというだけでは満足せず、一巻の書物、一冊の本の中に、王朝世界のみやびの精神を体現すべく、美しい料紙に美しい文字で書くことに情熱を燃やした、ということです。そのため、美術的にも極めて価値の高い本が数多く造られることになったのですが、室町から江戸にかけて、茶道の流行と共に、古人の筆跡を鑑賞する風が起ると、不幸にもそうした美しい本は、愛好家の求めに応じて、一枚一枚の紙片に分割されることになりました。こうして生まれたのが古筆切、すなわち古写本の断簡です。かつて江戸時代以前に書き写され、その全き姿を保って今日まで伝えられている本もけっして少なくはありませんが、その何十倍、何百倍もの本が切れ、断簡となってしまったところに、かえって平安・鎌倉期の写本というものの持つ特質が示されている、といえましょう。

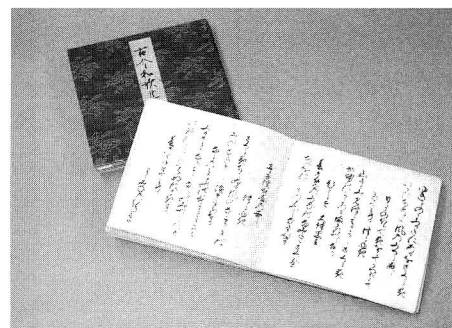
それでは、江戸時代に入って、文学作品を版本という形で読むことができるようになった時、人々は面倒な写本造りを止めてしまったかという、けっしてそうではありません。徳川300年を通して、写本はいつの時代にも造られ続けていたのです。これには、当時の出版流通事情というものが、現代とは比較にならないほど悪かったということも考えられましようが、それよりも、写本、一字一句人の手によって書き写されたものに対する日本人の特別な思いといったようなものが要因となっていた、とみるべきでしょう。このことは、明治以降も、作家の原稿や手紙などの肉筆資料が、研究という目的以外にも、文学愛好家から尊ばれ、喜ばれていることと、どこか共通する現象といえるでしょう。もっとも、

昨今では作家もワープロやパソコンに向って原稿を打ち出すというご時世ですから、このままでゆくと、21世紀には、日本における文字文化の様相もかなり変わってくるような気が致します。

では、ここで、今回の展示品の中から幾つか選んで、少し解説をしてみることにしましょう。

1の了佐切は、平安末期歌界の第一人者であった藤原俊成の書写した古今集の断簡。了佐切という名称は、江戸初期の鑑定家である古筆了佐の旧蔵にちなんだものです。俊成は生涯幾度も古今集を書写しており、かつその筆跡が早くから尊ばれたため、彼の書いた古今集の断簡は、顕広切・御家切・昭和切と色々伝わっていますが、この了佐切はおよそ俊成60代頃の書写になるものと思われます。俊成の筆跡は晩年になるに従って筆鋒の鋭い、角ばったものになってゆくのですが、この了佐切には、そうした俊成の筆癖がかなり顕著に出始めています。

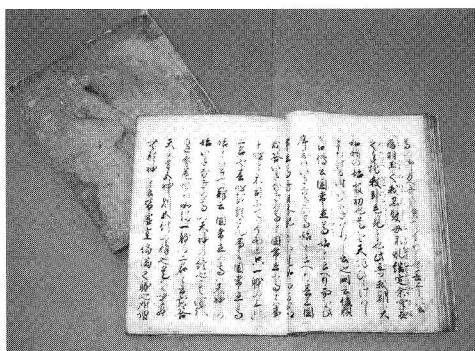
2の古今集は、天文5年(1536)に三井寺の時能というお坊さんによって書写されたものですが、とりわけその内容が注目される本です。というのも、藤原定家という人は大変精力的に古典を研究した人で、今日判明するだけでも、生涯17度も古今集を書写しているのですが、その内、建保5年(1217)2月本については、わずかに彼の書いた明月記という日記に記事が見えるだけで、これまで本文そのものの



2 古今和歌集 2帖 天文5年(1536)写

は全く知られていませんでした。ところが、最近関西大学図書館の所蔵に帰したこの本は、その奥書から建保5年2月本だということが判明したからです。これは定家本古今集の研究の上からは極めて貴重な資料といえましょう。

古今集は伊勢物語や源氏物語と共に昔から注釈書の多いことで知られた作品ですが、5の古今序聞書は、一般に古今和歌集序聞書三流抄とか、三流抄と呼ばれている中世期に書かれた注釈書です。伝本はけっして少なくはないのですが、そのほとんどが江戸時代も中期頃の写本であるのに対して、この関大本は書写もおおよそ慶長年間(1596-1615)頃にまで遡ることができ、かつ徳治2年(1307)の本奥書を有していて、注目されるものです。その本文上の特色などについては、すでに関西大学図書館影印叢書の第1巻に、片桐洋一教授が詳しい解説をしておられるので、そちらを参照して下さい。



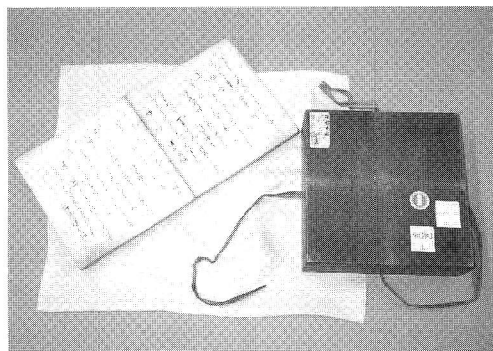
5 古今序聞書 2冊 江戸時代初期写

6の紹巴切は、わが国を代表する歌人であり、かつ秀れた古典学者でもあった藤原定家の書写になる後撰集の断簡。室町時代の連歌師里村紹巴がかつて所蔵していた本を分割したので、この名がつけました。定家という人は、古今集同様、後撰集も何度か書写していますが、その内、定家真跡本が完全な形で伝わっているのは、京都の冷泉家所蔵の天福本だけ。あとは皆後の転写本にすぎません。その点、この紹巴切は断簡になってしまったとはいえ、紛うことなき定家の真跡資料として、研究上の価値は極めて高いものがあるといえましょう。

7の後撰集はもと上・下2冊本の下冊のみですが、内容的にはいささか注目すべき点を含んでいます。先程も申しましたように、定家は生涯幾度も後撰集を書写していますが、その内、後世最も流布したのは、今もその原本が冷泉家にある天福2年(1234)3月の本。それに対して、これは貞応元年(1222)7月に書写した系統のもので、天福本に比べると、

比較にならないほど伝本の数が少ないものです。天正5年(1577)時宗の覚阿というお坊さんが書写しました。

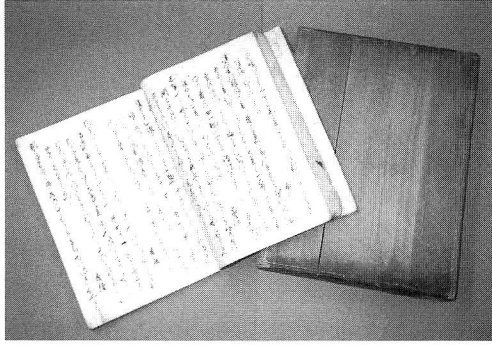
8の拾遺集は、これまた上・下2帖の上帖のみの本ですが、書写年代は古く、鎌倉時代にまで遡ることができるものです。本文は全体としては定家本の系統ですが、朱と墨の2種の書入れがありまして、それは異本系統の内容を伝えていて注目されます。この関大本の筆者を、大倉好斎という鑑定家は藤原為家としていますが、残念ながらその確証はありません。しかしながら、時代は為家が活躍したのと同じ頃のもので、これにより鎌倉時代の写本の雰囲気は十分味わってもらえることができるものと思います。なお、この本については、関西大学の「図書館フォーラム」創刊号(平成8年3月)に、片桐教授が詳しい紹介を試みています。



8 拾遺和歌集(上帖のみ) 1帖 鎌倉時代中期写

勅撰二十一代集の内、古今集から新古今集までは、八代集として後世の歌人たちから特別尊重され、しばしばセットで書写されました。9の後拾遺集から13の新古今集までは、そうした八代集の一部をなすものです。書写年代は江戸の前期ですが、版本で古典文学を読むことができたようになったこの時代においても、なお人々が相変わらず写本に強い魅力を感じていた様子がよく窺えます。特に上・下2帖に仕立てられた本については、表紙も見えるように展示してありますから、注意をして見て下さい。それぞれ思い思いの意匠が凝らされていて、楽しいものとなっています。

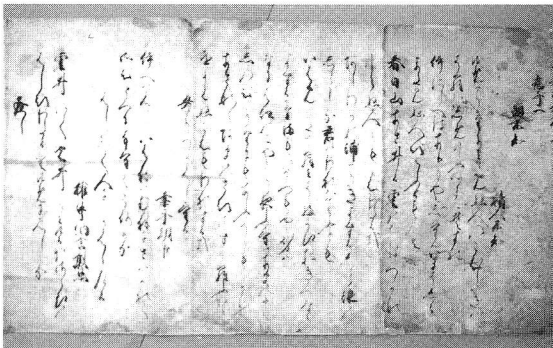
古今集ほどではないにしても、新古今集も昔から注釈書の多いことで知られる作品ですが、15の新古今集聞書もそうした注釈書の一つ。この関大本は元亀2年(1571)の本奥書を持つ、およそ桃山時代に書写されたものですが、これまで天下一本とされてきた牧野文庫本より書写年代が古く、加えて牧野本の本文上の誤りを訂正することができる貴重な本で



15 新古今集聞書 1冊 桃山時代写

す。このことを私は最近になって甲南女子大学で講師をしておられる近藤美奈子さんから伺いました。おそらく近い内に近藤さんから、その研究成果が発表されることでしょう。

16の新勅撰集は巻11のみの残欠本で、もとは四半形の冊子本であったものを、後になって卷子本に改装したものです。この関大本はおよそ鎌倉の後期頃に書き写されたものですが、新勅撰集といえ、文暦2年（1235）に藤原定家が撰していますから、作品の成立からたかだか半世紀ほどしか経っていない頃の写本ということになり、その古さが注目される伝本といえましょう。



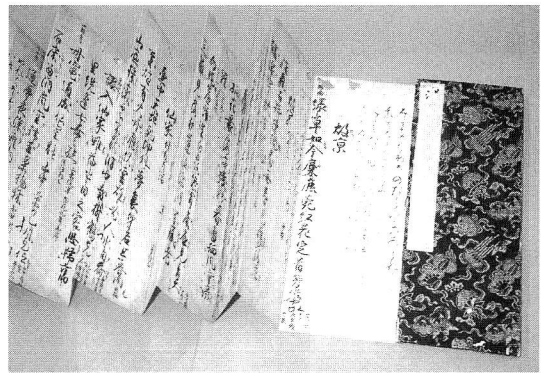
16 新勅撰和歌集（巻11のみ） 1巻 鎌倉時代後期写

平安時代には、勅撰集の他に夥しい数の私撰集が編まれています。しかし、勅撰集とは違って、これら私撰集の多くは歴史の彼方に消え去ってしまい、残念ながら今日その姿を窺い知ることができません。ただ、古筆切の中には、そうした散佚私撰集の内容を伝えているものがあります。18の如意宝集切もその一つ。如意宝集は藤原公任の撰かと推定されている作品で、近衛家旧蔵の如意宝集目録によって、全体の構成・歌数は8巻775首であったことが知られています。この如意宝集の内容を伝える貴重な断簡は、昔から筆者を鎌倉第6代将軍の宗尊親王などと称していますが、そんなに時代が下るものではなく、仮名古筆の最高峰といわれる高野切古今集第Ⅱ種の

書風を受継いで、およそ11世紀後半頃の書写と推定されるものです。今回の展示品の中では、一番古いものですが、仮名の書道芸術が頂点に達した平安中期の雰囲気をよく伝えてくれています。

和漢朗詠集は当時の貴族社会にあって機会あるごとに朗誦されていた漢詩と和歌とを集めて上・下2巻に仕立てたもの。これがひと度公任によって撰せられるや、王朝貴族の嗜好にいたく叶い、実に夥しい数の写本が造られました。この和漢朗詠集の隆盛ぶりに匹敵するのは、勅撰集でも古今集ぐらいなものです。しかしながら、今日数多く伝わる平安朝書写の朗詠集の古写本・古筆切の中で、筆者と書写年次とが明確に知られるものとなると、まことに寥々たるもので、そうした極めて稀な例が19の多賀切です。この多賀切は幸いその奥書部分が京都の陽明文庫に伝わっていて、そこに「永久四年孟冬二日扶老眼点了／愚叟基俊」とあり、百人一首などでもお馴染みの藤原基俊が永久四年（1116）に書写したことが知られます。この基俊という人は俊成の歌の師で、書風においても俊成に影響を与えたといわれていますから、1の了佐切と比べて見ていただくといいでしょう。

20の和漢朗詠集は、もと卷子本であったものを、改装して折本に仕立てたもので、上・下2巻の下巻部分しか伝わっていませんが、朱筆による声点・ヲコト点なども数多く書入れられており、国文学上の貴重な資料ともなっています。

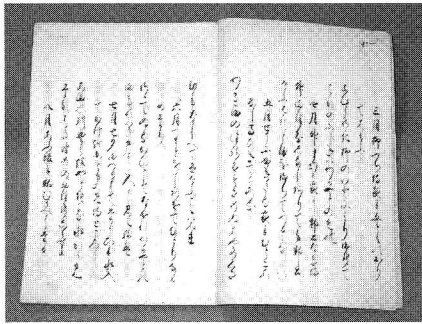


20 和漢朗詠集（下帖のみ） 1帖 鎌倉時代後期写

平安時代には、勅撰集や私撰集の他に、貫之なら貫之の、和泉式部なら和泉式部の歌だけを集めた個人の歌集というものが数多く編まれています。今日研究者はこのような歌集を私家集と呼んでいます。21の升型本曾丹集切というのも、そうした私家集の断簡。曾丹集とは平安中期に活躍した曾祢好忠という人の私家集です。この切は昔から筆者を有名な西

行と言い伝えて、愛好家の間でも人気の高いものだったのですが、近年になって冷泉家にまだ本の形を保って伝えられていることが分かり、学界でも大いに話題となりました。平安時代末期およそ12世紀後半頃の書写と思われますが、かなり無雑作にスピードをもって書かれているところに特色があります。

22の恵慶集は、やはり百人一首で知られる恵慶というお坊さんの私家集。関西大学図書館に蔵されて



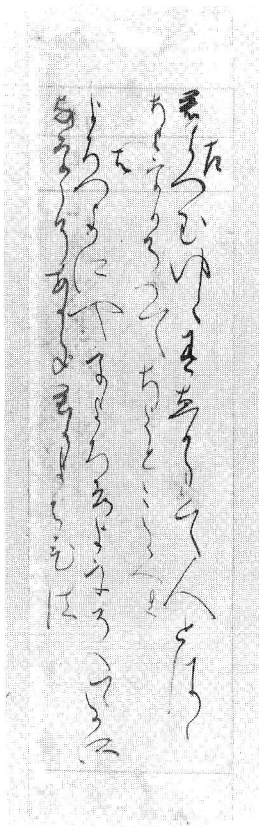
22 恵慶集 1冊 江戸時代後期写

いる岩崎美隆文庫本の内の1冊で、書写年代は江戸の後期と大分下りますが、熊本守雄さんという方の『恵慶集校本

と研究』という本によりますと、一般にあまり流布していない系統のもので、他の本の誤りを訂正することもできる貴重な資料のようです。

古典の和歌には、歌合と呼ばれる作品があります。

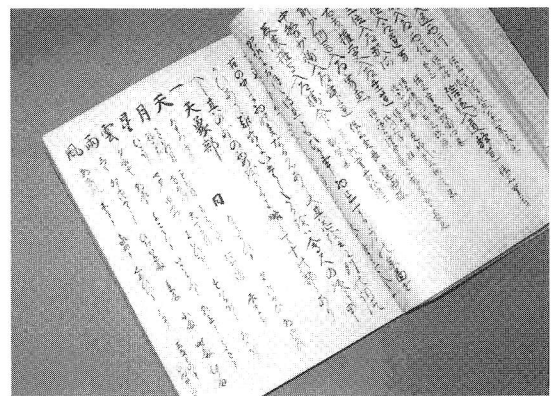
これは歌人たちが左右のグループに分かれ、与えられた題に従って歌を詠み、その優劣を競い合うものですが、平安時代を通じて何百回となく行われた歌合の記録を集成するという大規模な事業が、おおよそ12世紀の初め頃になされました。これを世に二十卷本類聚歌合といいます。この時の一連の写本群は、その後近衛家に伝わり、現在も陽明文庫に残っています。が、一部は早く巷間に流出し、それが切断されて、柏木切とか二条殿切と呼ばれ、古筆愛好家の収集の対象となっています。25の二条殿切がそれで、これは治暦2年(1066)頃に行われた滝口本所歌合の最終番「祝」題の部分。この類聚歌合は



25 二条殿切
1葉 平安時代後期写
田中 登 蔵

結局清書にまでは至らず、草稿の段階で作業が中断してしまったといわれていますが、それだけに、この二条殿切の文字には、飾りのないいわば普段着の良さといったものが窺えます。

平安時代の和歌もそれなりに歴史を経てくると、過去を振り返り、それらを研究しようという姿勢が生まれてきます。こうして平安の後期から鎌倉期にかけて数多くの歌学書が著わされました。26の和歌色葉もそうした歌学書の一つ。これは建久9年(1198)上覚というお坊さんによって書かれたものですが、この関大本は黒田彰子さんという方の『中世和歌論攷』にも紹介され、学界にもよく知られた本です。



26 和歌色葉 1冊 江戸時代初期写

以上、駆足で展示品の一部についてお話をしてきましたが、いかがだったでしょうか。「王朝和歌の世界」と題する今回の展示では、歌人でいえば、紀貫之から藤原定家までの、約400年間にわたる和歌の歴史を、古今集から新勅撰集までの9つの勅撰集によってほぼ概観できるようにし、それに若干の私撰集・私家集・歌合・歌学書を配して、王朝和歌の幅の広さを理解してもらえよう試みました。また、展示品が書き写された時代は、平安・鎌倉・室町・桃山・江戸と各時代にわたっていますから、これによって書風の歴史的な変遷といったものも、併せて鑑賞していただければ、幸いです。

(たなか のぼる 文学部教授)

この講演は、平成10年度冬季特別展「王朝和歌の世界—写本の魅力—」にちなみ、記念講演会として平成10年11月17日(火)に図書館ホールで開催したものである。

図版の展示品は、田中 登教授所蔵の1点(写真25)以外、すべて関西大学図書館蔵(貴重書)である。